

2019年を振り返って

地域連携センター長 塚原 成幸

2019年は何かと「〇〇最後」や「〇〇初」などと表現されることの多い1年でした。そう考えますと、私たちはつくづくキャッチフレーズに弱い国民なんだと感じます。新しく始まった2020年はどのようなフレーズが生まれるのでしょうか。

さて、日頃から地域とともに多様な活動を展開させていただいている、本学の地域連携センターでは、今年度もさまざまな公開講座を手がけてきました。ちなみに今年度は、春学期に22講座、秋学期に20講座開講し、多くの皆様に受講していただくことができました。

さらに教員が地域に向き日頃の研究成果や専門領域について講義する、出張講座もおかげさまで好評を得ております。昨年春からは長野駅東口の駅前に看護学部も開学し、講座の種類も豊富になってきました。公開講座や出張講座は、地域の皆様方と直接お会いできる貴重な機会であり、これからも充実した内容をお届けできるように、鋭意努力していきたいと考えております。もし、「こんなことを学びたい」「過去に学んだことをもっと深めたい」といったご意見やご要望がありましたら、お気軽に当センターまでお寄せいただけたらと思います。

また、当センターでは、毎年、秋に映画上映会を開催しております。今年度は、9月7日に刀川和也監督の「隣(とな)る人」を上映しました。全国でおよそ3万人が利用しているといわれる児童養護施設の実践を8年間にわたって記録したドキュメンタリー映画です。児童養

護施設という点、親と死別した子どもが入所すると思われがちですが、近年の入所理由は親からの虐待が圧倒的です。年々増加傾向にある児童虐待の相談件数ですが、虐待の発生要因は簡単には特定できません。こういった現状も地域全体で問題意識を持ち、さらに具体的な支援につながる手立てを構築することが大切だと思います。

「地域で起きていることに関心を持ち、地域で暮らす私たちが解決の糸口を模索する」。当センターがその一助になれるよう、これからも微力ながら活動していきたいと考えています。

令和元年台風19号 豪雨災害の支援活動について

台風19号による記録的な豪雨とそれに起因する河川の氾濫は、本学が所在する長野市周辺地域に甚大な被害をもたらしました。本学の教職員や学生のなかには、直接的な被害を受けた人も複数存在し、誰もが予想していなかった自然災害の怖さを実感しました。

当センターには、2011年の東日本大震災の支援を契機に、「清泉女学院復興支援プロジェクト」が設置されています。過去には、2014年に発生した長



被災住宅清掃活動ボランティア

野県神城断層地震や南木曾町の豪雨災害での支援活動なども行ってきました。しかし、これほど隣接した地域で災害に見舞われることは開学以来、初めてのことでした。

台風19号による被害は地域に深刻な打撃を与え、未だに復興への道筋は楽観できない状況です。今回の災害を受け、本学では微力ながら、災害ボランティア活動を実施してきました。その一部(当センター担当分)について紹介したいと思います。

- ① 清掃活動のボランティア
- ② 緊急 幼児&学童保育(お預かり)の実施
- ③ 避難所への学校図書(貸し出し)
- ④ 北部レクリエーションパーク(避難所)に

災害復興ボランティアに参加して



幼児教育科 1年 徳永 智沙

身近で発生した台風19号による災害は、甚大な影響を及ぼしました。家財の運び出しや泥の掻き出し作業、りんご畑や田んぼなどの農地の整備、復旧作業が必要な親のための児童一時預かり、避難所における保育活動、街頭募金活動など、復旧のためにできることはそれぞれの立場から一つではないことを知りました。

とくに、幼児教育科の学生として関わった本学での児童一時預かりの活動では、正確なニーズが分からないという戸惑いはあったものの、いざ当日になってみると、情報を得た保護者の方々が次々に訪れたという実感がありました。子どもたちにとっても、思い切り遊ぶ場所があることでストレスを分散させられるという目的が叶ったと感じます。そして何より、

⑤ 看護学部による健康、生活相談

以上の活動は、主に10月15〜22日にかけての休校期間に行われ、この期間に参加した学生数は、181名を数えました。

災害発生から3カ月が経過した現在でも、多くの方が応急仮設住宅などに身を寄せ、不自由な生活を送っています。ここにあらためて今回の災害に対し、被災された方々に深くお見舞いを申し上げます。



幼児&学童保育のようす

必要な人に必要な情報が届くことの達成感がありました。

今回災害ボランティアを経験して感じたことは、継続支援がいかに大切かということ。災害直後はその状況についてメディアで多く取り上げられ心を寄せる人が多くいると思いますが、情報は日に日に新しいものへと変わっていき、大災害があったこともいつしか数多くのニュースの中の一つという認識へと変わっていきます。現地で復旧活動に継続的に関わる人がいることで、風化を食い止めその後に防災の教訓を伝えることができます。これからも自分ができる範囲において援助を継続する必要があると感じました。

さまざまな場所、さまざまな分野で多くのボランティアの手が求められています。しがらみのない立場である学生がボランティアという形で社会に参加することは、地域にとっても学生自身にとっても大変意味のあることだと感じます。人々のためになる喜びを感じながら、謙虚な気持ちでさまざまな活動に関わっていきたいと思います。